

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2019年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	多世帯居住に関する研究開発
研究代表者	河崎 由美子（積水ハウス株式会社 住生活研究所 所長）
共同研究者	王 飛雪（大阪市立大学 生活科学研究科 特任助教） 小伊藤 亜希子（大阪市立大学 生活科学研究科 教授）

**研究成果**

戦後の日本では、核家族化が進行し、さらに近年は単身世帯や夫婦のみ世帯等少数世帯など少数世帯が増加し、従来型の三世帯居住世帯はますます減少傾向にある。しかし、今後急速に押し寄せる少子高齢の課題に直面する中、支え合いやコミュニケーションを伴う多様な形態での多世帯居住の存在価値がクローズアップしてくると予想される。

本研究は、介護、子育て等の相互ケア、生活共同化の視点から、「多世帯居住の暮らし」とその経年変化に注目する。現代における多様な多世帯居住の動向とニーズを把握し、対応する住まい方提案を行うことを目的とする。本年度の研究結果と学会発表、発信は以下に示す通りである。

**①2019年度研究結果**

2018年度に行った近居の親世帯と子世帯を対象とした多世帯居住アンケート調査（N=1236）より、親世帯と子世帯は時間距離が短いほど、孫が小さいほど生活共同化が進むことが分かった。

2019年度は、生活共同化が進んでおり、親子の交流が盛んな近居する親子世帯に着目し、住み方調査を行った。子育て中の子世帯と時間距離15分以内に居住する親世帯の住まい（8件）を対象としている。

生活共同化は、孫を中心とした交流、食事で進んでおり、子どもが小さいほど密である。孫の持ち物が親世帯の家に保管されているなど、時間だけでなく、空間面でも生活共同化が進んでいることが分かった。

**②学会**

本年度の研究結果として、学会に梗概を投稿している（6本）。

- ・2020年度日本建築学会 近畿支部研究発表会
  - ・子育て中の子世帯と近居する親世帯のライフスタイル（その1）－生活共同化の実態について－
  - ・子育て中の子世帯と近居する親世帯のライフスタイル（その2）－住空間と住まい方の特徴－
- ・2020年度日本建築学会大会（関東）
  - ・子育て中の子世帯と近居する親世帯の住み方調査（その1）－子世帯の行き来と交流－
  - ・子育て中の子世帯と近居する親世帯の住み方調査（その2）－親世帯の家で子世帯が過ごす空間－
  - ・子育て中の子世帯と近居する親世帯の住み方調査（その3）－親世帯にある子世帯および孫の物－
  - ・子育て中の子世帯と近居する親世帯の住み方調査（その4）－生活共同化における親世帯の負担と意識－

**③情報発信**

積水ハウスマンションオーナー様雑誌、積水ハウス住ムフムラボ（グランフロント大阪北館4階）にて一般生活者への情報発信を行った。

- ・グランドメゾン・ジーエム vol.53（2019初秋）

「わが家らしい“近居”スタイルを見つけよう！」と題して、2018年度研究結果を発信。

世帯間の交流を時間距離別に紹介。自分に最適な距離感がつかめるよう情報提供を行う。

親世帯と子世帯の行き来で近居スタイルを4つのパターンに分け、住まい方の一つとして紹介する。

- ・近居のススメ展示評価会（積水ハウス 住ムフムラボ／グランフロント大阪北館4階）

積水ハウスの運営する情報受発信拠点である住ムフムラボにて、

近居の暮らしに関する情報発信を「カゾクが集まって暮らすカタチ」として展示。

親世帯と子世帯の距離感や提案について、来館者による評価を実施した。

